

藤本昌也の低層集合住宅作品における「コミュニティ」の創造意識について —「コミュニティ」を記述する際の「地縁」的側面に着目して—

About the creative consciousness of "community" in low-rise apartments by Masaya Fujimoto

— Focusing on the territorial aspect of describing "community"—

○矢野智也¹, 田所辰之助²

*Tomoya Yano¹, Shinnosuke Tadokoro²

This study clarifies the creative consciousness of "community" in low-rise apartments of Masaya Fujimoto, mainly in the 1970s, by focusing on the territorial aspect when describing "community". Through this research, we aim to depict the historical character of the living environment peculiar to this era by re-evaluating the living environment plan that includes Japan's unique human sensibilities.

1. 研究背景と目的

これまでの通説において1970年代前後の時期は、住環境の分野において1973年の住宅白書の「住宅問題は量から質へ変わった」という宣言を契機とした、住環境論の意識の転換期とされている。景気が低迷する渦中に様々な団体によって、多角的に住環境の供給方法が模索される一方で^[1]、従来からの日本人の住まい方に生活形態を合わせようとした建築家の提案による議論も積極的に為されていた。1970年代は公団による大規模な宅地開発が沈静化して以降、建築の分野に留まらない学際的な視点を基に、様々な建築家によって住環境論とコミュニティ論が表裏一体な関係として議論が隆盛した。

その潮流の中心に位置していた建築家・藤本昌也(1937—)は「茨城県営六番池団地」(1976)を皮切りとした低層集合住宅を中心に、生活空間の人間的感性を内包した住環境計画を提案した。この人間性の回帰という大きな問いの中で住環境計画を主導した藤本昌也の創造意識を検証することによって、現代の住環境における「コミュニティ」の在り方の再検討を可能ならしめるという視点から、本稿では「コミュニティ」を記述する際の「地縁」的側面に着目することで、藤本昌也の低層集合住宅における「コミュニティ」の創造意識の再評価を行う。その上で当時の住環境における史的性格の描出を目的としている。



Figure 1. Ibaraki Prefectural Mito Rokubanike housing complex*

1 : 日大理工・院 (前)・建築, 2 : 日大理工・教員・建築

2. 研究対象と方法

1970年代を中心とした建築系雑誌における住環境論又はコミュニティ論が記述された文献を分析対象とする。抽出された各論を体系化することで、藤本昌也の「コミュニティ」の創造意識の一端を明らかにする。

3. 1970年代における建築学のコミュニティ論

建築計画学の分野において「コミュニティ」の問題が注視されるようになった大きな要因として、日本住宅公団(1955—)による集合住宅団地の供給の背景にある人間性の回復を望む意識が大きい。建築計画の分野において、コミュニティ計画理念のひとつとして、公共集合住宅は集団生活ではなく共同生活の場として位置付ける主張がなされる。それと同時に「共同」の用語が使われ60年頃になると「共同」に代わる「共用」の用語が現れ、コミュニティの意識が研究者に広がる。しかし、60年以降は団地の地域社会化が検討されるが本格化するのは75年以降になる。そして、1975年以降は住戸まわり研究が発生し、住戸の内と外の関わりを重視する視点が起こる。一方で、領域研究の方法が示され、住宅団地の戸外生活についての研究が為されるようになってゆく。^[2]

また、広く建築学の分野では60年代末から70年代にかけて複数の建築雑誌に特集^[3]が組まれたことによって「コミュニティ」への意識は顕在化した。当時の建築家たちは発散する「コミュニティ」の諸概念に危機感を示しつつ、神代雄一郎らはデザイン・サーベイによるコミュニティ調査において、フィジカルだけでなくコミュニティの精神的側面を捉える必要性を訴えると同時に、日本における「コミュニティ」では、人々の共同体意識を生むことに自然の起伏が起因していると記述している。^[4]

4. 藤本昌也の「コミュニティ」の創造意識

4-1. <大地性>と低層集合住宅

藤本昌也(1937-)は、早稲田大学の在学中に、メタボリズムの榎文彦・大高正人チームの計画づくりに参加した。卒業後は建築家大高正人の下で10年間(1962-1973)実務に携わり、大高建築設計事務所の主要作品である「坂出人工土地」(1962-1968)、「多摩ニュータウン関連調査」(1965-1967)、「広島市営基町・長寿園高層アパート」(1968-1977)を担当する。そのような、人工土地の提案を通して住環境における土地との結びつきや、人間性の回復を志向する意識が萌芽したと考えられる。

独立後は、現代計画研究所(1972-)を設立し、藤本は「われわれが共有すべき理念と方法は如何なるものか」をテーマに議論していこうということになり、都市計画家・蓑原敬、彫刻家・関根伸夫、建築史家・小能林宏城らを中心に“日本土人会”なるものを発足させた。日本土会発想のポイントは、これまでの西洋近代主義路線と一線を画し、“近代”に対して日本という“地域”を対置させることによって、物事の有様を根本から見直そうというところにあった。そして、その意図を私なりに<大地性の復権>という言葉に集約したのである。」と述べおり、土地に根差した<地域>への関心を表している。^[5]藤本はその後、<大地性>の復権という設計理念を「茨城県営水戸六番池団地」(1976)を皮切りに、低層集合住宅を中心に発表している。その中において、藤本昌也の「コミュニティ」を創造する場として、地面から連続する住戸間の街路空間を配し、「コミュニティ・ストリート」と名付けていることから、「コミュニティ」における土地と連続した道空間の重要性を示している。

4-2. 「環境構造」による<大地との共生>

藤本は、次第に健全な地域コミュニティに資するという社会的意義を持った住環境設計の方式であるコーポラティブ方式の再構築に取り組む。それは、「躯体、住戸分離システム」を空間原理とする、集住空間の設計手法である<コープ住宅>の提案である。集合住宅における生活者の要望を汲む住戸を、都市の中間領域を形成する<環境構造>としての躯体を用いて都市住宅を分離することの提案だが、この<環境構造>は藤本のハード(空間)の側面の「コミュニティ」の創造意識が反映されている。一方で、ソフト(生活)の側面の「コミュニティ」の創造意識において藤本は、「躯体・住戸によって分離された空間要素をひとつの空間形式として統合する役割を果たすのが、「共」の空間である。そし

て、この「共」の空間の具現化への確かな手掛かりは、具体的な生活者相互の応答によって描き出される「共同生活像」以外にない。」と記述している。^[5]そこで、「共生」の意識は、地域社会が対抗する、環境汚染や高齢化への抵抗の意識に起因するということを論じると同時に「大地への共生」を意味していると述べられている。^[6]ここから藤本独自の「コミュニティ」における「地縁」的側面の創造意識の一端が垣間見られる。

5. まとめ

本研究では、藤本昌也の低層集合住宅における「コミュニティ」の創造意識を「コミュニティ」を記述する際の「地縁」的側面という考察軸をもとに検証することで次のことを明らかにした。

まず、1970年代に興隆したコミュニティ論を包括的に検証することで、「コミュニティ」の意味の諸相を確認した。また藤本は、大高建築設計事務所と“日本土人会”の活動を経て<大地>を通じた<地域>への興味を育み、当時の環境問題を背景として、低層集合住宅における地縁的「コミュニティ」の意識を表出させていたのではないかと。地域としての場が抱える、自然環境問題に対する抵抗意識も組み込みながら、住民の「共同生活像」の共有による「コミュニティ」は、現代における地縁的「コミュニティ」としても作用し得ると考えられる。

藤本の「コミュニティ」に関する創造意識の系譜は、住環境の創造意識の展開に必要な、現代では消失してしまった地縁に内在するコミュニティを、建築を通して再考することに対し十分に示唆的である。

6. 参考文献

- [1]「新建築 1977年6月臨時増刊 現代集合住宅の展望」『新建築』新建築社、1977年6月号
- [2]『集合住宅計画研究史』日本建築学会、1989年
- [3]「特集|コミュニティ研究 総括」『都市住宅』鹿島出版会、1970年12月号
- [4]伊藤ていじ、神代雄一郎、平良敬一「特集・コミュニティ建築は可能か-1地域共同体と環境への視座」『SD』鹿島出版会、1971年1月号
- [5]藤本昌也『大地性の復権』、住まいの図書館出版局、1998年
- [6]住田昌二・藤本昌也他編著『参加と共生の住まいづくり』学芸出版会、2002年
- [*]現代計画研究所「茨城県営水戸六番池団地」『新建築』新建築社、1976年7月号